

---

# Almighty Wizard ~ 全知全能の魔法使い ~

黒蝶 白夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Almighty Wizard（全知全能の魔法使い）

### 【Nコード】

N8616X

### 【作者名】

黒蝶 白夜

### 【あらすじ】

親友と幼馴染みと妹に巻き込まれて、俺まで異世界に召喚されてしまった。

そこでは、魔法が普通に使われており、科学は使われていなかった。そこで、勇者として、魔王を倒してくれと言われたが、俺は………

.....

主人公最強になります。

## プロローグ

### 俺と妹と幼馴染みと親友と

俺は今、幼馴染みと妹と親友と帰っている。でも、俺は独りである  
いている。

どうしてだ、と思っているだろう？それはな、みんな親友の隣を歩  
いているからだ。

因みに俺はこいつらの後ろを歩いている。目の前でそんなのを見せ  
付けられると……………

悲しくなってくる。

突然だが、ここで紹介をしよう。

俺こと、齋条 黒斗で、

見た目は、自分で下の中ぐらいで、成績は、上の中ぐらい。特技は、  
家事全般だ。

次に、俺の親友、北上 雷火で見た目は上の上、成績は上の上。こ  
いつは、俺が中学2年生のとき、友達になった。高校では、ファン  
クラブがあるほどのカッコよくて、みんなから、頼られるほど優し  
い。

次は、俺の幼馴染みの佐藤 穂香で見た目は、上の上成績も雷火と  
同じで上の上。こいつは、俺が幼稚園の頃からの付き合いだ。毎度  
毎度、思うんだが、こいつは何故俺と一緒に居てくれたんだ？と思  
うがこいつも優しいからだと納得している。そして、こいつもファ  
ンクラブがあるほどの奴だ。

因みにこいつの家は、剣道の道場があり、そこで、剣道を教えてい  
る。こいつもやっているため滅茶苦茶強い。

次は、俺の妹、佐々木 紬で、見た目は上の上、成績も上の上。こ  
いつとは、妹だが、今は、赤の他人だ。それは、両親が離婚して、  
俺は、親父の方。妹が、母親の方に。だから、俺と妹は赤の他人な  
のだ。

とりあえず紹介は済んだが、俺らは今、暴力団のアジトに居た。こいつらは、正義感が異常なほどあり、うちの学校の生徒が何かやられてやり返しに来たんだと。

そしてこいつらは、後始末はしていかない。だから、俺がしている。今日もした。

死ぬほど疲れるんだよ、後始末。

そして、今こいつらと帰っている。

数分間俺は黙々と歩いたとき、自分の足元に魔方陣を見つけた。この感じからして、こいつらを呼んでいると察し、もう少し止まって、巻き込まれない程度の距離で歩き始めた。

こいつらは俺が少し離れたのを気付いていないから、後はこいつらがやってくれるだろうと思っただが、3人中2人が気づいて近寄ってきた。それは、妹と幼馴染みだった。2人は俺に

「どうしたの、黒斗？」

「どうしたのよ、本当に？」

疑問に思われては困るから、

「大丈夫だよ。少し、疲れただけだから。」

嘘をついてしまったが大丈夫だろうか？

「そう？辛かったら言っただけ？」

「兄貴に、倒れてもらっちゃ此方が困るんだから、早めに言っただけ。」

そう思ったが、杞憂だった。

「ありがとう、2人ととも。」

と微笑みながら言ったが、2人ととも怒ってしまったのか、顔を赤くしてそっぽを向いた。

その瞬間、足元の魔方陣が光だした。

駄目だったか………そう思いながら、光が俺と3人を包み込んだ。

目を開けると、そこは何処かの部屋だった。

後ろに気配を感じて、振り向くと、そこには、巫女の服を着た少女と3人の女性騎士が居た。

何か驚いていたが俺は情報がほしいから、巫女の少女に話しかけた。

「……………えっと、ここは何処かな？」

「……………ここは、シューメルトと言う世界で、貴方方を勇者として、召喚したのですが。」

「そうか、それで何故か4人居たので驚いていたのか。」

「…は、はい。そうです。」

「それで、俺たちはこのあとどうすればいいの？」

「それは、まず、王様に会ってもらいます。」

「解った。さつさと案内してくれ。」

と言ったら、3人の女性騎士が動き出そうとしたが、巫女の少女に止められた。

「それでは、行きましようか。」

そう言つて、歩き出したので俺たちは付いていった。

因みに、3人はとっくに起きていました。俺が話しているうちに起きたのだ。

ブローグ 俺と妹と幼馴染みと親友と(後書き)

どんな感想も待っています。

誤字などがありましたらご指摘ください。

それでは。

第1話 俺と少女と神達と(前書き)

久しぶりに書きました。  
それではどうぞ。

## 第1話 俺と少女と神達と

突然だが、俺は今、王様の前にいる。

王様に今どういう状況なのかを聞いている最中。俺は聞いていませんがね。と言うか長いんだよ、話……。だって、軽く30分も話すんだよ!!その間ずーっと立っているんだよ!!

と少々壊れておりました、斎条 黒斗です。

ちなみに王様の話はさつき終わりました。話をまとめると、魔王が魔族をまとめて、自分達の国を攻めて来て、しかも、魔王軍一千万に対して、こちらは百万人。圧倒的な戦力の差である。そして後はわかる通り勇者を召喚しようと言った様になり、そして、召喚されたのが俺達と。

流し流し聞いていた俺は、とてもキレている。それはそうだろう。

コイツらの勝手にアイツらの人生が変わってしまうのだから。

そして、俺自身にもキレていた。あの時魔方阵を壊していればこんなことにはならなかった筈なのに……!!

俺が自分の過ちを悔やんでいると、雷火は王様に向かって

「分かりました、王様!!この世界には成り行きで来てしまったけど、僕は苦しんでいる人々をこの手で救いたいです!!まだ弱いかもしれませんが、きっと魔王を倒して見せます!!」

更に穂香までも

「私も雷火と同じ気持ちです!!魔王は許せません!!」

「私は魔王とかどうでも良いのよ!!」

おっ、戦わないでくれるのか、紬よ。



「だけど、やればなしでは私の気がすまないわ。だから、手伝ってあげるわよ!!!」

我が妹よ。それは無いんじゃないか？  
仕方無いので俺もノリで

「じゃあ、俺も戦おうかな？」

と疑問系で答えておく。その方が後で楽だからな!!  
そして、みんな(?)が魔王討伐を誓ったら、王様が

「それでは、勇者様達には覚醒してもらうために勇者の間に行ってもらいます。

それでは、娘のフィーナに着いて行って下さい。」

そうやって巫女の格好をして俺達を召喚した少女が俺達の前に出てきて

「それでは、私に付いて来て下さいね。」

そう言って歩き出した。俺達はそれに付いていった。

それから5分間豪華な廊下を歩いていたらフィーナが突然ある1つの部屋の前で立ち止まり

「こちらが勇者の間です。私達は中に入ることが出来ませんの、皆さんだけで入って頂きます。

この部屋の中には色々な武器や防具が有りますので自由に選んで下さいね。」

その事を聞いて俺はフィーナに

「それじゃあ全部とはいかないけど結構持っていかれるんじゃないのか？」

「いいえ、そんな事は無いです。この中にある武器や防具達は使う人を選ぶらしいですよ。だから、そんな事を有り得ないですよ。」

それを聞いた俺は礼を言おうとしたが、雷火が先に言ってしまった。

「教えて頂きありがとうございます、フィーナ様。」

それに対して、王女様は顔を赤くしてもじもじし始めた。

俺は、落としたな、と思ってた。妹達はどう思っているのかなと思いい見てみたが、平然としていた。

俺の視線に気がついた妹と幼馴染みは怒ったのか顔を赤くして顔を逸らした。

そんなこんなで、俺達は勇者の間へと入っていった。

「なんだよ、この部屋……………！？」

部屋に入った瞬間に俺はこんな事を言った。

そこに有ったのは武器が山積みになって、その回りに防具がある。

その量が尋常じゃない。その山があと十個以上あるのだ。とりあえず、俺達は

「……………選ぶつか。」

「……………そ、そうだね。」

そう言って、選ぶことにした。

選ぶことにして10分が経った。でもまだ俺は決まっていない。

「どれにするかな？……………ん、これなんかいいんじゃないか？」

そう言って俺は腕輪を取った。

すると、目の前が真っ暗になり俺は目を閉じた。

次、目を開けるとそこは夜の草原だった。

「……………自分自身の心理かよ……………」。

「貴方は驚かないのですか？」

と突然後ろから声が聞こえて

「俺は少し特殊なんでね。」

そう言いながら振り返った。そこに居たのは、15歳ぐらいの少女だった。俺は

「驚いたな。君は何者なんだ？」

その言葉に少女は泣き出しそんな顔をした。そんな顔を見た俺は

「嫌なら言わなくて良いよ。どんな人でも俺は構わないし、君が言えるようになったら教えても欲しい。」

少女はその言葉を聞いた瞬間目に涙を溜めた。俺はそれに対して

「泣きたければ泣けば良い。俺が受け止めるから、いくらでも泣けば良いよ。君が背負ってきたモノを俺にも背負わせてくれないかな？」

俺は少女を抱き締めながら言った。やはり、泣かれるのは嫌だから。少女は俺が抱き締めてからすぐに泣いた。それから、5分後、少女は泣き止んだ。そして、自分の過去を語った。

「私の属性は闇なんです。だから、私を選んだ人達はいつも殺されるんです！！」

闇は、魔族の象徴だから。そんな理由で殺されるんです！！だから、私はこんなの嫌なんです！！私はなにも出来ないから……………！！使ってくれた人がいつも殺されるのを見てることしか出来ないから……………！！」

俺はそれに

「なら俺は死なないよ。」

「嘘です!!」

「嘘じゃないよ。」

「なら見せてくださいよ!!死なない事を!!私が安心できると言うことを!!」

「分かったよ。」

……………見てるんだろ、お前ら。」

俺は誰もいないところに声をかけた。すると

「貴方はやっぱりお人好しですね。でもそんなところも私は好きですから」

と髪の毛が紅色の美女が言って、

「私も好きですから、そんな黒斗を」

と髪の毛が蒼色の美女が言って

「増やさないでよ、黒斗。心配しちゃうから」

と髪の毛が碧色の美女が言って

「本当よ、黒斗」

と髪の毛が茶色の美女が言って

「……………うん……………」

と髪の毛が黄色の美女が言って

「大好き」

と髪の毛が白色の美女が言って

「……………ダメ……………抜け駆けは……………」

と髪の毛が黒色の美女が言って

「本当よ、アンタは。」

と髪の毛が銀色の美女が言って

「やめなさいよ、アンタ達。」

と髪の毛が金色の美女が言って

「本当、だよ。喧嘩、は、ダメ。」

と髪の毛が漆黒の美女が言って

「黒斗」

と髪の毛が色々混ぜた美女が言って

「じっくん」

と髪の毛が灰色の美女が言って

「黙りなさい。」

と髪の毛が白黒の美女が言って

「アナタ達ね……………」

と髪の毛が純白の白色の美女が言った。

「……………お前ら、自己紹介ぐらい言えよ……………」

と俺が言った。そうしたら、まずは、紅色の美女が

「初めまして。私は、アストリヤの火の神をしています、ヒリヤと申します。」

次は、蒼色の美女が

「初めまして、私も同じ所で水の神をしています、ミズキと言います。」

次は、碧色の美女が

「初めまして。私も右に同じで、私は風の神をしています、フウカと言います。」

次は、黄色の美女が

「……………私は、雷の神でライナ。ヨロシク。」

次は、茶色の美女が

「ウチは土の神をしてる、ツチカ。ヨロシクね。」

次は、白色の美女が

「私は、勇者の神のソフィアと申します。ヨロシクお願いしますね。」

「

次は、黒色の美女が

「……………私は……………魔王の神……………クロヒ……………ヨロ

シク……………」

次は、銀色の美女が

「私は、月の神のルナと申します。宜しくお願いしますね。」

次は、金色の美女が

「私は、光の神、ヒカルと言います。」

次は、漆黒の美女が

「私、は、闇、の、神、ヤミカ。」

次は、色々な色が混ざった美女が



「私は、混沌の神、カオス。」

次は、灰色の美女が

「私は、時間と空間の神、クロス。」

次は、白黒色の美女が

「ボクは、邪神のアストール。」

最後に純白の美女が

「私は、創造と破壊の神、オーディーナ」

自己紹介が終わり、俺は少女に

「これが俺が死なない理由だ!!!」

一度言葉を切って、

「これでも信じられないか？俺は絶対に死なん!!!」

俺は最後に微笑んだ、優しく。すると、少女は

「信じますっ!!!私は貴方を!!!」

「そうか、よかった。」

少女は俺に抱きついて、キスをしてきた。  
数秒経って、少女は離れた。

「これで契約は終わりました。御主人様の力を覚醒させましたので、確認して下さい。」

「分かったよ。それと、御主人様って？」

俺が聞くと、少女は

「私の御主人様だからです。それと、名前をつけて頂けませんか？」

「そうだな……………」

コイツは悲しんでいたのだから、二度と悲しまないようにと意味をした方が良くないのかな？

それとも……………ん、良いのが思い付いたぞ！！  
コイツの名前は、

「決めた。お前の名前は、アカリだ！！  
闇を優しく包む明かりとなるようにと。」

それを聞いた、アカリは

「は、はい。御主人様」

と言った。喜んでくれたなと思いながら、俺は、

「俺を元のところに戻してくれないか？」

「分かりました。」

「ありがとう、それじゃあ後でなみんな!」

そう言って俺は目を閉じた。

第1話 俺と少女と神達と（後書き）

どんな感想も待っています。

誤字などがありましたらご指摘ください。

面白いと思って頂けたのなら嬉しいです。

それでは、また。

## 第2話 私と兄さんとお姉さんと

袖side

私は今、彼氏（偽）の雷火さんと兄さん、穂香さんと歩いている。何故偽だと言うのかは、私が兄さんに心配させるために。だけど、兄さんは心配しなかった。それはそうだ。相手は親友なのだから。私は兄さんに心配させるために頑張った。色々な危ないところへと行ったりと。だけど、全部ダメだった。悲しかった。

ここで少し昔話をしよう。ある兄弟の。

ある日、一人の兄と、一人の妹が居た。その兄弟はとても仲が良かった。兄は妹の事をいつも守っていたし、妹はその兄の守ってくれる背中が好きだった。友達は居なかったが、妹は兄と遊ぶのが好きだった。ある日、兄が一人の少女と知り合った。妹は兄だけでは、出来なかった遊びが出来るようになり、とても喜んだ。だけど、幸せは長くは続かなかった。

二人の両親が離婚することになってしまったからだ。この事を知っていたのは、兄だけで妹は知らなかった。そして両親はどちらか一人連れていくことになった。母親は妹を、父親は兄の事を。そして、最後の日に兄は少女に告白した。少女に対して自分が居なくなることを告げずに。だけど結果はダメだった。兄はひどく傷付き、妹はその姿を見て、自分の胸が締め付けられるような痛みを感じただけど、考えることをしなかった。いつも一緒に居られると思っていたから。次の日妹は兄と離れ離れになった。泣いたけど、ダメだった。その時漸く、気が付いた。兄の事を好きになっていたことに。そして離れ離れになって数年間、妹は自分の事を磨いた。いつか、会った時に自分の事を好きになってもらうために。そして高校一年になった時、再会した。だけど、兄は妹の事を他人事のように扱っていた。その事に対して妹は何度も何度も泣いた。それでも、アタックし続けた。好きだから。兄さんの事が。

そして、父さんが死んで兄さんの事を引き取る事になった。それでも、兄さんは自分達の事を他人事のように接していた。そして歩いていくと、私達は目の前が光、目を瞑った。そして、目を開けると、そこには私達が知らないような世界だった。

この世界には、魔王がいて、魔法があった。そして、私達に魔王を倒せと王様は言った。最初は嫌だったけど、雷火さんがアイコンタクトで私と穂香さんに『魔王を倒したら、黒斗が振り向いてくれるんじゃない？』と伝えてきて穂香さんは即答した。私は迷ったけど答えた。

そして、私達は武器を選んだ。私は、槍を、双槍のギルティードと

エルフェイトを選んだ。そして、覚醒させてもらい、私はこの世界の事を聞いた。

この世界は一夫多妻制で兄弟同士でも結婚が出来ることを知り、私は決心した。絶対に兄さんと結婚することを！！  
そう思いながら、目を閉じた。

穂香 side

私は、黒斗の事を愛している。昔、私は黒斗に告白された。その時の私は、ツンデレと言われていた。だから、断るような事を言った。次の日に私は少し素直になりやっぱり良いことを伝えようとした。だけど出来なかった。紬ちゃんが泣いていて、どうしてだろうと思いついた。黒斗が居なくなること聞いて、最初は嘘だと思った。だけど、現実だった。その時になってようやく、気が付いた。黒斗が告白してきた事の意味を。泣いて、泣いて、泣きまくった。そして黒斗と再び会うときまで、私は世界が色褪せていた。黒斗と会ってから世界が華やかになっていた。そして、黒斗に話し掛けて気が付いた。私の事を他人のように接していることに。私は黒斗の事を愛しているのに、あの時のせいで黒斗とは親しくなくなった。だけど、絶対に振り向かせてあげるから、黒斗！！

第2話 私と兄さんとお姉さん(後書き)

どんな感想も待っています。

誤字などがありましたらご指摘ください。

それでは。



### 第3話 俺と幼馴染みと騎士の誓いと

目を開けた先に居たのは、目を閉じて何やら俺に近付いている穂香だった。穂香は目を閉じていたので、俺が目を開けたことに気付かずに迫ってくる。

とりあえず、俺がすることは避けることだ。

何故避けるのかは、アイツには好きな人がいて、俺と居るところを見られたら、ヤバイからだ！つまり、雷火の事だ！よく雷火と喋っているのを見かけるからだ。

そして、俺が避けたことにより穂香は転んでしまった。俺は慌てて支えた。だって、転ぶとは思わなかったから。その間、穂香は転びそうになって目を開けて、また目を瞑った。怖くて反射的に瞑ったのだろう。

穂香 side

私は今、私の愛しい想い人にキスをしようとしている。普段隙を見せない黒斗が目を瞑って、しかも無防備なのだから！！

私はチャンスだと思い、目を瞑って黒斗に迫った。

あと少しでキスができる、その事が頭の中をぐるぐる繰り返し駆け巡った。あと少しでキスができると言うところで、私は転びそうになった。何故だろうと思いい目を開けたら床が迫っていた。怖くて目を瞑った。

ただどいくら待っても衝撃がこなかった。何故だろうと思いい目を開けて目線の先に居たのはなんと、黒斗だった！！

ここで黒斗の容姿の説明をしよう。

黒斗は普段から自分の容姿を下の中ぐらいだと思っているらしいが、本当は上の上以上。

そして、私は黒斗に

「あ、ありがとう／＼／＼……………やっぱりカッコいい。」

と言った。それに対して黒斗はもう仕分けなさそうな顔をして

「すまん、避けて。転びそうになるなんて思ってなかったんだ。」

と謝ってきた。私が悪いのに、自分が悪いって謝るなんて優しすぎるよ、黒斗……………。

私は黒斗に

「私が悪かったの。黒斗が謝ることなんてないんだよ?」

そう言ったら、黒斗は

「俺が避けなかったら転びそうになることはなかったから。」

その言葉を聞いて私は、慌てて話を変えた。このままだとずーっと続きそうだったから。

「黒斗は何を選んだの? 私はこの二つの剣。」

そう言って私は二つの剣、ラハルとアスヤを見せる。黒斗は私の剣を見て、

「いい剣を手に入れたな。」

そう言って私の頭を撫でた。私は顔を真っ赤にしていたと思う。それぐらい恥ずかしかったけど、それ以上に嬉しかったからだ。

そんな幸せの時間は長くは続かなかった。それは黒斗が手を離して

しまったからだ。それに対して私は

「あっ……………」

と言ってしまった。それに対して黒斗は

「今度は、雷火にやってもらえな？」

とお前が好きな人は分かってる、といった顔をして私に言った。  
私は頬を膨らませて、黒斗に聞こえないぐらいの声で、

「……………私がやって欲しいのは黒斗だけなのに。何で勘違いするのかな？私には魅力がないのかな？やっぱり、私じゃあ黒斗に釣り合わないのかな？」

ネガティブな思考に走っていたら、黒斗は

「俺はずっとお前を守り続けるよ。」

「えっ！…！どういう事！？」

私が問うと黒斗は

「そのまま意味なんだが。でも、お前が好きな人と一緒になったら俺じゃないソイツに守ってもらえな？」

私はそれを聞いて、あることを思い付いた。

黒斗は今、好きな人が出来たらソイツに守ってもらえと。ならずー  
ーと守ってもらえるのじゃないのかと。だから私は黒斗に

「私を守ってね、黒斗」

「分かりましたよ、お姫様。」

そう言っつて、私の前に片膝をついて騎士が忠誠を誓うように言っつた。

私はそれを見て

「……………ずーっつと守ってね、黒斗。私が愛しているのは、黒斗だけなんだからね」

小さい声で言っつた。

第3話 俺と幼馴染みと騎士の誓いと（後書き）

どんな感想も待っています。

誤字などがありましたらご指摘ください。

それでは。

#### 第4話 俺と女騎士と決闘過程と

あの穂香を守る宣言をしてから数日が経った。あのあとすぐ紬と雷火が自分の武器を見つけた。紬は二双の槍と軽めの防具、雷火はまさに勇者と言った感じの防具、剣、盾だった。

その日は、武器を選んだだけで終わった。

次の日は、それぞれの武器を使って、騎士達と模擬戦をしただけで終わった。

そして三日目、今現在。俺は、今騎士の中でトップクラスの實力を持つ女と相對している。それも相手から物凄く睨まれている。

俺が何をしたーーーーっ!!!

俺は空を仰ぎながら、そんな悲鳴を上げていた。そもそも、何故こうなったのだろうか？少し過去を振り返ってみるか。

~~~~~回想~~~~~

「（キスしても大丈夫だよ、穂香さん？）」

何だか誰かの声が聞こえてくるな~~~~。

俺はそんなことを考えていた。体は少しずつ起き出しながら、意識はまだ寝ていた。だから、誰が何の話をしているのか、どんな内容なのか分からなかった。このときしっかりと起きていればあんなことには……………っ。

「（大丈夫ですよ、紬ちゃん。それより、あの事は本当なんですよね？）」

「（本当ですよ、この世界は一夫多妻制が認められています。）」

「（安心しました。これで心置きなくやれますね　それでは、誰が先にキスをしますか？）」

「（ジャンケンで決めますか？それとも一緒にしますか？私は兄さんと出来ればいいんですけどね　でもやっぱり兄さんの初めてを奪いたい。）」

「（そうですね。やっぱり一緒にキスをしますか。その方が私にとっても細ちゃんにとってもいいみたいです。）」

「（そうですね。兄さんとキスできるなんて夢みたい。）」

「（それでは）」

俺は何となく目を開けた。本当に何となく。開けて最初に写ったのは穂香と絢が目を瞑ってこちらに近づいて何かをしようとしている姿だった。だから俺がすることは………

「何をやるうとしているんだ、お前らは？」

「「えっ！！」」

「二人揃って、えっ、とはなんだよ。だから何をしようとしていたんだよ？」

「あ、兄さんを起こそうとお思っただけです。ねえ、穂香さん？」

「そうですね！！別に深い意味はないんです！！！」

「そうか。ありがとな、二人とも。」

そう言つて俺は二人の頭を撫でた。俺の事を起こそうとしてくれたことに感謝しての事だ。だってそうだろう？理由はともあれ起こしに来てくれたのだから。撫でていると二人とも風邪を引いたかのように、顔を赤くした。そして二人は

「ああありがたく思つてよね!!」

「たたたたまたまです。気分が向いたから起こしに来ただけです！」

上から、紬、穂香の順だ。俺はそれを聞いて

「そうか……………でもありがとな。俺みたいな奴を起こすのは嫌なのに起こしてくれて。でも、もう起こしに来なくていいよ。二人にも好きな人がいるだろ？ソイツに勘違いされるかもしれないからな。それに二人は美人だから、俺みたいな不細工は傍に居ちゃいけないんだと思うんだ。」

俺は二人に対して、自分の本音を言った。紛れもない本音だ。

俺のその言葉に対して二人は俯き出した。俺は二人に何かあったのかと思い、二人に、どうしたんだ？と言おうとしたが言えなかった。何故なら、二人に押し倒されたからだ。幸い、後ろはベットだったので怪我はなかった。怪我は無かったけど危ないので、俺は二人を怒ろうとしたが

「そんなに自分を無下にしないでください……………グスッ…

……………」



泣きながらそんなことを言われれば何も言えないじゃないか。だから俺は

「……………ごめんな。」

そう言って二人を抱き締めた。泣かせてしまったから落ち着かせるために。

とそこで、扉が開いて

「遅いぞ、穂香、紬！！これから、私と戦う……………話……………だろ？」

俺は突然入ってきたそいつを見て嫌な汗がたらたらと流れるのを感じた。見たことがない奴だが、今の状態を見られているのはヤバイ！！勘違いしてしまう！！

「貴様っ！！何をやっている！！二人をどうするきだ！！」

ほら、こんな風に。ちなみに、今俺たちの状態は、俺に抱きついて泣いている二人、俺は抱き締めている。しかも不細工の俺が。だから、俺は必死に弁解した。

「ち、違う！！と言うか誰だお前！？何でノックをしないんだよ！？何でここにいるんだよ！？」

「な、何が違うと言うんだ！！それに私は、王族騎士団騎士長フィルナ・A・ストラートと言う者だ！！ここに来た理由は、その二人と決闘するためだ！！そして扉を開けたらこのような状態になっているとは！！は、破廉恥な！！今からお前を成敗してやる！！決闘だ！！」

「……………どうせ、何を言っても決闘されるんだろ。分かったよ、決闘をすればいいんだろ？それで何時殺るんだ？」

俺は今イラついている。勝手に勘違いして、決闘を申し込んだ女に對して。

第4話 俺と女騎士と決闘過程と（後書き）

どんな感想も待っています。

誤字などがありましたらご指摘ください。

それでは。

## 第5話 私と謎の男と決闘と

フィルナside

私は今黒斗と言う奴と睨めつけながら対峙している。黒斗は私から見ると隙がありすぎて、本気を出さなくても勝てるほどだった。だけど、絶対に相手を侮ることはしてはいけない。

私は穂香と紬から聞いていた情報を頭の中で繰り返し繰り返し思い出していた。その内容とは、黒斗はとても強いと言う事。あの二人でも勝てなかつたらしい。あの二人は私のい（・）つ（・）も（・）の（・）状態で互角ぐらいなのに。その二人を持ってしても勝てないと言わせる實力を持っているはずなのに、全く何も感じない。プレッシャー等を感じないのだ。おかしい、強いと言われているのに、この中で一番弱く感じてしまう。そんな葛藤の中審判の音が響いた。

「これより、王族騎士団騎士長フィルナ・A・ストライト対 異世界の勇者 斎条 黒斗の決闘を始めます。お互いに、私が始めと言ったら始めてください。それでは、始めっ！！」

その声が聞こえた瞬間、私は走りだした。剣は元々抜いてあったのでそのまま私は斬りかかった。

最初は様子見として右下からの突き上げを繰り返した。それに対して黒斗は左に避けて回避した。

次は、そのまま右へと剣を振る。それは後ろに避けてしまう。

そんなのが何回も続いた。私は焦っていた。それもそうだ。簡単に倒せると思っていたのに倒せてもいないし、黒斗は一切剣を使ってもいない。それだけならまだ何とかかなるのだが、私が剣を振るう度に私の動きが詠まれているのだ。そんなの相手に当然私は

「くっ………まだですっ！！喰らいなさい！！三閃っ！！」

業を使った。この業、三閃は単純に三回斬る業だ。但し光おも越える速さで。これを受けられる者は世界中を探しても一桁ぐらいしかない。私は少々本気を出しすぎてしまったかと思ったが、それは杞憂だった。

黒斗は私の三閃を喰らってもなお立っていた。そして

「……………いい一撃だな。でもお前の実力はこんなもんじゃないだろう？早く俺にお前の本気を見せてくれ！！」

「……………何の事だ？私は何時でも本気だぞ！！」

「この空間を支配した。ここでの会話は、外には決して漏れない。だから、本当のお前を俺に見せてくれ。」

「分かりました、いいでしょう。私の本当の力を見せてあげますよ！！」

『その刀は何時も我が近くにあり、我を守るモノ！！神々により創り出された神刀よ！！我が前に出よ！！』神刀 エクトーゼ！！」

私がそう言って現れた刀は、創造神が創ったとされる刀だ。私が使える最強の刀。刃の色は白で一度も使われたことがないような白さを保っている。私は黒斗に

「私の準備は出来た。黒斗は何も使わなくて良いのか？」

「何を言っている。武器はすでに俺の手の中にあるだろうが。」

そう言ったので私は黒斗の右手を見た。そこには、一本の刀が握られていた。刀身の色が黒の刀を。私は黒斗に走り出した。今は剣の事を気にしている暇は無いと判断したからだ。

「はっ！！」

下からの突き上げ、それを黒斗は上から振り下ろして防いだ。

「くっ……………」

相手のパワーに押されそうになるが何とか押さし返した。

「喰らえ……………っ！！！」

今度はイナズマのような突きを出した。この突きは刺さった。刺さったと思った瞬間黒斗がブレ始めて居なくなった。気が付いたときには私の首筋に刀が置かれていた。そして黒斗は私に向かって

「強いな。この世界ではお前に勝てる奴はあまり居ないだろう。但しこの世界ではな。」

面白そうだから、俺と一緒に行動しないか？あと、一週間ぐらいで俺、この城から出ていこうかと思っているから、無断で。」

そう言って、私に悪戯を成功させた子供のように無邪気に微笑みながら言ってきた。

その微笑みを見た瞬間、胸が締め付けられる痛みを襲われた。この痛みの謎が分からなかったから、私は

「考えさせてくれ。」

と言った。すると、黒斗は

「分かった。いい返事を待っているよ。」

そう言っつて、黒斗は傷付いた自分を造り出し、寝かせた。そして私に向かっつて

「あとのこと頼むわ。」

そう言っつて黒い空間を創り出してその中に入っつていった。

私は一人残された。一人と言っつても実際は二人いるが。

そして、黒斗が創っつた空間が壊れて元に居た場所に帰っつてきた。

第5話 私と謎の男と決闘と（後書き）

どんな感想も待っています。

誤字などがありましたらご指摘ください。

それでは。



## 第6話 俺とギルドと説明前と

俺は今ギルドと呼ばれる建物の前に来ている。それも一人でだ。あの決闘はただの俺がギルドへと向かうための口実としてやっていただけであつて、本当にキレていた訳ではない。あと、この騎士達の実力を見てみたかったからだ。そんなこんなで、俺はギルドの扉を開けた。

「中つて結構綺麗なんだな」

そうなのだ。外見は少し古いものなのに中は新品に近い状態だった。これには吃驚した。

俺のそんな声が珍しいのか、ギルドの中に居た人が俺の事を見てきた。

俺はそんな視線を無視して、登録するために受付のところへと歩いていった。

受付に着くとそこに居たのは俺と同じ年ぐらいの女性だった。可愛いとは違い綺麗と言った感じの女性だ。

その女性は少しぼーっとしていたが俺が

「ギルド登録したいのだが、ここで出来るか？」

と言っただけで、急いで笑みを浮かべた。そして俺の疑問に對して

「は、はい。こちらでギルド登録出来ます。本日はギルド登録をするために来たと思つてよろしいですか？」

「ああ。」

そう言っただけは頷きながら言った。それを見た女性は

「まずはこの紙に名前を書いてくださいますか？」

それを聞いた俺は、ヤバイ！！この世界の文字書けないじゃん！！  
どうしよう！！と内心思っていた。

一向に書かない俺を見た女性は

「どうなさいましたか？」

俺はそれに

「文字が書けません。どうすればいいでしょうか？」

と言った。それに対して女性の方は

「先に言ってくれば良いのに。そうすれば代わりに書くのに。  
それじゃあ、名前を教えてください？」

急に口調が砕けたが気にしない。それがこの人の素なんだろう。そ  
れにこの申し出はかなり嬉しい。文字を見る機会ができるから。

「お願いします。俺の名前は、黒斗・斎条と言った。」

「はい、書けたわよ。それじゃあ、これからギルドの説明をするわ  
ね。」

そう言った。俺は

「その前に名前を覚えてくれないか？」

俺がそう言っていると、女性は

「あれっ。言っていないかったっけ？まあいいや。私の名前は、カレン・A・ストラートと言っの。」

ストラートと言えばさっき俺と殺り合った女騎士の名前もストラートだよな。姉妹か？

俺が考え事していると、カレンが説明を始めた。

## 第7話 俺と説明とギルドカードと

「まずはこのギルドの事について説明させて頂きます。知っているかもしれませんがギルドとは人々の役に立つための場所であり、また魔物を討伐するための場所です。

次に、ギルドのランクについてです。ランクとはその人の実力を示す物であります。

下から順に、F・E・D・C・B・Aとなり、Aから上はS・SS・SSS・EX・Z・Gとなっています。Aから上は世界中でも100人ぐらいしか居なくて、SSから上は20ぐらいしか居ません。現在最高ランクはSSSで、女性の方です。

最初は誰でもFからスタートになります。これで説明を終えます。それでは、探索者になるための能力値を測ります。最後に何か質問はありますか？」

「自分より上の依頼は受けられないのか？」

「受けられないことはないんですけど、ギルドは責任を持ちません。」

「そうか。ありがとう、カノン。」

そうやって俺はカノンに微笑んだ。すると風邪気味なのか顔を赤くして答えた。

「い、いえ。お役に立てて嬉しいです……。」

「それで次はどうするんだ？」

「それでは此方に来てください。」

そう言われたので俺はカノンの居るところへと向かった。そこにあつたのはなんか大きな機械だつた。カノンは俺に向かってこの機械の説明をしてきた。

「この機械は、今の能力値を測りそれを分かりやすくまとめてくれます。そしてこれにはレベルが存在し魔物などを倒すと経験値が手に入りレベルがアップします。」

「そうか。」

「それでは機械の中心に立つてください。」

そう言つて俺は機械の中心に立つた。そして、立つた瞬間足元が光だした。何事かと思ひ動こうとしたとき、カノンが

「動かないでください、大丈夫です。この光は能力値を測り、分かりやすくまとめてくれる光です。」

それを聞いた俺は頷き動かなかつた。一分ぐらいしたら光が弱まり、そして無くなつた。

「これで全て終わりました。お手元にカードがある筈だから確認してね。」

最後の方は素に戻つて言われた。とりあえず、俺は手を見た。そこにはカードがあつた。このカードが何なのかを聞くために俺はカノンに聞こうとしたがよく見てみると、何か書いてあつた。とりあえず読んでみた。

名前 斎条 黒斗

能力値

|    |   |
|----|---|
| 筋力 | D |
| 体力 | E |
| 魔力 | C |
| 速さ | D |
| 運  | C |
| 精神 | C |

称号：無し

特性：無し

職業：無し

装備：学生服（上下）、黒の腕輪

と書いてあった。とりあえず、終わったのでカノンに礼を言って依頼を受けるために掲示板のところへと向かった。

第7話 俺と説明とギルドカードと（後書き）

誤字などがありましたらご指摘ください。

感想も待っています。

それでは

## 第8話 俺と依頼と門番と

掲示板まで着き何かいい仕事がないか探していた。その中で一つの依頼が俺の目に入った。その依頼とはこんなものだった。

シュートル山にだけ生えている薬草のフユ草の採取。1キロぐらい。  
場所：サイマ王国の北部に向かって五キロ進んだところにある。

ランクF

受託ランクF)

報酬：銅貨三枚

サイマ王国とは俺たちが召喚された王国の事だ。世界のことは追々語っていくとしてとりあえず受けるために掲示板から取る。

受ける理由は、半日で帰れる距離で低いランクでこれ以上高い報酬がこれだけしか無かったからだ。もちろん高い報酬のはあるんだが、Fじゃあ受けられない依頼ばかりだ。

だから俺はこの依頼を選んだ。  
そんなこんなで俺はカノンが居るところへと歩いていく。そしてカノンのところに着いた。

「この依頼を受けたいんだが」

そう言って渡すとカノンは少し驚いた顔をして俺に向かって言った。

「わかりました。では頑張ってください。

それにしても、登録してすぐに受けるんですか、偉いですね。  
失敗しないようにしてくださいね。では」

俺はそれを聞いてギルドの外へと出た。



王国の外へと出るために、俺は門のところへと向かった。

歩いて十分ぐらいして門のところに着いた。そのまま歩き門の下に居る門番の人が見えてきた。そして門の下に着いて俺は門番の人に

「この王国から出たいのだが、いいか？」

「別に大丈夫だが、お前さん見ない顔だな。」

俺はそれを聞いた瞬間黙ってしまった。それはそうだろう。俺はこの国に勇者として召喚された。そしてまだこの事を公にしていない。だって育てる時間が必要だから。弱いのに戦争の前線に立たれても困るからだ。そんな訳で誰にもまだ言えない。俺はどうするか悩んでいた。

どうする？ 適当に誤魔化すか？ それとも黙っていくか？

そんなことを考えていると門番の人は

「言いたくなければ言わなくていい。」

俺はそれを聞いて門番の人の顔を見た。その人は笑っていた。多分俺の驚いた顔を見て笑ったんだと思う。

「……………ありがとうございます。」

「頑張れよ、青年。戻ってくるの待ってるよ。」

「名前を教えてもらってもよろしいですか？」

「まあ構わないが。俺の名前は、ラール・A・ユッドモースと言っ  
んだ。」

俺はそれを聞いて

「ありがとうございます、ユツドモースさん。」

それを聞いたユツドモースさんは照れたように笑い俺に向かって

「ユツドモースさんじゃなくていい。ルールでいい。と言うかルールって読んでくれ。」

そう言われたので俺はユツドモースさんではなく、ルールさんに向かって

「わかりました、ルールさん。」

俺がそう言うとルールさんは「さんもないんだがな……………」  
とやっていたが聞かなかったことにした。  
話していく内に門が開いた。俺は外に向かって歩きながらだけど振り向かないでルールさんに向かって言う。

「本当にありがとうございます。」

そして門が閉まる音が俺の背中の後ろから聞こえた。

門から歩いて五分ぐらいのところまで俺は立ち止まり周りに結界を張った。

「総てを包み込む絶対なる結界。如何なる力を持ってしても壊れず、  
中の人に安心を与える。」

アイキス  
絶対防壁！！！

「さて。もう出て来てもいいぞ。」

俺はアイツ等に声を掛けた。

アカリside

私は呼ばれたので出てきた。勿論、姉様達と一緒に。でも姉様達と言っても私とオーディーナ姉様とルナ姉様だけだけど。出てくると空が何故だか灰色になっていた。私は御主人様に

「御主人様。この空の色は何ですか？」

「嗚呼、これは絶対防壁アイギスだよ、アカリ。」

私はそれを聞いて

「何ですかそれは？」

御主人様は私にわかるように説明してくれました。

「アイギスは外からのどんな攻撃も通さず絶対に守り、中はどんな攻撃を使っても絶対にバレないんだよ、そう言うのを消してしまうから。」

それとコレを使わないと俺の魔力がバレちゃうからな。」

私はそれを聞いて確かにも思った。御主人様の魔力は高すぎる。こ

の世界の人達が集まっても足りないくらいに。

私の御主人様は本当にスゴいですからね！！

私は御主人様の話を聞きながらそんなことを思っていた。

第8話 俺と依頼と門番と（後書き）

どんな感想も待っています。

誤字などがありましたらご指摘ください。

それでは。

第9話 私と御主人様と姉様達と（前書き）

試験中で遅くなってしまいましたですが書いてみました。  
皆様の目に留められる作品だと嬉しいです。

それではどうぞ。

## 第9話 私と御主人様と姉様達と

「オーディーナ、ルナ。とりあえず俺の力を封印してくれ。」

そう言った瞬間、アカリが驚いた顔をして俺に向かって言った。

「何で御主人様の力を封印するのですか？封印しなくても御主人様は制御出来るんじゃないですか？」

「制御が出来るくらいじゃ駄目なんだよ。」

「何ですか？」

俺はアカリに

「俺がキレた時力を押さえられないからな。だから、封印するんだ。とりあえず頼むわ、二人とも。」

「分かったわ、黒斗。」

そう言ってオーディーナは一旦言葉を切った。そしてルナに向かって言う。

「それじゃあやるわよ、ルナ。準備はいい？」

「私は何時でもオツケーよ。」

「そう。じゃあ黒斗！！始めるから、こっちに立って！！」

そう言われたので俺はとりあえずオーディーナが言った場所へと立った。

「コレでいいか？」

「ありがとう。それじゃ始めましょうか。」

そう言った瞬間俺の足元に魔方陣が浮かんだ。そして光だし、俺の事を包み込んでいく。

俺はその中で暖かい光によって守られていた。

「我望む、汝の力を封印する事を。我思う、それが汝の為ならばと。」

汝の力を封印し、汝の魔力を封印し、汝の能力を封印す。

我等星と星の神にして星を代表する者なり。汝が力を封印する者なり。」

「我、世界の創造主なる者。」

「我、闇を照らす星の主なる者。」

「封印せよ！！」

その言葉を言った瞬間俺の事を包んでいた光は目を瞑っていても眩しいと思えるほどの光だった。

数秒して段々と光が弱まっていくのを感じた俺はオーディーナとルナに

「ありがとな、二人とも。これで俺が心配することが一つ無くなっ  
たわ。」

さて依頼の場所に行きますかっ！！」

アカリside



御主人様を包んでいた光が無くなった瞬間御主人様は

「ありがとな、二人とも。これで俺が心配することが一つ無くなっ  
たわ。」

さて依頼の場所に行きますかっ！！」

と言ったが御主人様は場所を知っているのだろうか？この世界の住  
人だと分かるけど、御主人様は最近来た人。どうやって行くのだろ  
うと思っていると御主人様が私の所へと来た。そして御主人様は

「ちよつと、ごめんな……………」

「……………えっ……………」

と言っている間に御主人様は私の頭を撫でた。

えっ……………っええ！！！！ななな何で御主人様はわわわ私の頭をななな  
撫でているのですか！！！？意味が解りません！！でも嬉しいです  
！！……………ってオーディーナ姉様とルナ姉様が物凄い目で私の事  
を見てるよ！！怖い！！

でも、御主人様が頭を撫でるの気持ちいい。だから

「ふえっ……………ふにゃー……………」

となってしまうたのです。私がそれを言う度に姉様達が物凄い目で  
私を睨んでいます。それでも御主人様は私の事を撫で続けます。

「あと少しだな……………」

そんな事を御主人様が言っていたが私には届かなかつた。

それから数十秒に御主人様は私の頭から手を離れた。その時私は

「あっ……………」

と言ってしまった。その声を聞いた御主人様は微笑みながら私に向かっ

「また今度な。」

「なら私にもしてくれるわよね？」

「アカリにだけじゃないわよね？も・ち・も・ん私たちにもしてくれるわよね？」

と御主人様が言った瞬間オーディーナ姉様とルナ姉様が御主人様に物凄い勢いで詰めよって言いました。

御主人様は顔を引き攣らせながらオーディーナ姉様とルナ姉様に

「こ、今度な。」

「絶対よ！！約束だからね！！」

「私も待っているからね！！」

御主人様が言うつと間髪を容れずお姉様たちは言った。

御主人様は引き攣った顔を元に戻し、真面目な顔になって

「それじゃあ、行くか。」

と言った。私はそれに

「場所は知っているのですか、御主人様？」

御主人様は私の疑問に対して

「知っているよ。さっき、アカリの頭の中を見て場所を記憶したら。」

と答えてくれました。私は顔が赤くなっていると思います。だって、物凄く顔が熱いから。御主人様に顔を見せたくなくて顔を下に向けた。

何で顔が赤くなったのかは、御主人様に私の気持ちが伝わったと思うから。御主人様の事を愛していると言う事が。私がそんな事を考えていると、御主人様は

「何故顔を赤くしているんだ！？……………もしかして怒ってるのか？それはそうだよ……………。この世界の必要な事を知るためと言っても勝手にアカリの頭の中を見ちゃったから……………。ごめん！！最低限の情報しか見てないけど、本当にごめん！！」

私はそれを聞いて顔を上げた。そして、御主人様に

「……………必要な事ってどんなことですか？」

「それはこの世界の事だな。」

とはっきりと言ってくれました。私は

「御主人様何て知らない！！！」

とそっぽを向いて御主人様から少し離れた。御主人様はそんな私を

見て

「ごめん！一回何でも言うこと聞くから！！」

私はその言葉を聞いた瞬間、私は御主人様に向かって

「わ、分かりました、許しましょう！！許すかわりに約束絶対に忘れないで下さいね！！」

許しましたとも。だって御主人様が一回だけ言うことを聞いてくれるんですよ！？

許さないといけないじゃないですか！！

そんな事を考えている私に御主人様はホツとしたように

「ありがとな。」

と言いました。そして

「それじゃあ行こうか！！瞬間移動！！」  
テレポルト

御主人様がそう言った瞬間私たちの前には山がありました。

第9話 私と御主人様と姉様達と（後書き）

この次の話で誰かの過去を書くかどうかと思うのですが誰の過去を書くか迷っています。誰の過去を書くかの意見を聞きたいと思っています。どんな意見もお待ちしておりますのでよろしくお願いします。

誤字などがありましたらご指摘ください。

感想などもお待ちしております。

それでは

## 第10話

### 俺と狼とバトルと仲間と（前書き）

誰かの過去やるつもりでいたのですが、まだ早いと思いやめることにしました。身勝手なことで申し訳ありませんがお許しください。

それでは第10話をどうぞ。

## 第10話

### 俺と狼とバトルと仲間と

突然だが俺たちは今シュトール山の頂上にいる。俺たちと言っても今ここに居るのは俺一人だけで他の奴らとはぐれてしまった。

俺が頂上に居るのは転移の魔法のせいなんだがな。

他の奴等はこのシュトール山の何処かには居ると思う  
多分。

とりあえずみんなを探しにいかないと、な！！特にアカリが心配だからな。オーディーナとルナは特に心配しなくても誰も襲わないと思うしな。と言うか襲っても勝てないし返り討ちにあうだけだがな！！

動くか動かないかどうしよう？動いて更に居場所が分からなくなったりしたりするかもしれないし。でも動かないとなると少し寒いしな。どうしたらいいんだ！！

天は私をどうしたいのですか！？なぜ私にこのような試練をするのですか、天よ！！私が何をやったと言うのですか！！何故でしょうか！！

スイマセン、少々壊れてしまいました。でももう大丈夫です。

そんなんでようやく心が落ち着いてきた俺は山を降りようと決断した。

それじゃあ行くか！！

『何処へ行くこうとしておる？小僧。』

やっぱり駄目でした。なぜ俺が壊れたのかは目の前に大きな狼が居るからだ。それで俺は現実逃避をしていたのだ。でももう誤魔化しきれないみたいだな。

俺は腹をくくって

無視することにした。挨拶ぐらいはし

た方がいいよな。

そんなことを思った俺は目の前の狼に向かって

「じゃあな、狼さん!!」

そう言ってその狼が居る位置の反対側に向かってダッシュをした。

あの狼から逃げてどれくらい経っただろうか。一時間だろうか、はたまた十分ぐらいだろうか。自分では分からないくらい走りに走った。

流石に撒けただろうと思いつち止まった。

「ハアー、ハアー、ハアー

これだけ走れば流石にあの巨

体じゃ追い付けないだろう。

あーっー疲れた。」

「妾が普通の者だったら追い付かなかっただろうが、妾は普通ではないので残念だったな。

それにしても今日は久々に良い獲物に出会えたのう。」

「普通じゃないのか。それに良い獲物って誰のことだ?」



『妾の目の前に居る、お主じゃ。』

「その前に俺は誰と喋っているんだ？」

『お主が逃げた原因だな。』

「そうかそうか　　って俺逃げ切れてなかったの！？そして俺喰われるのか！？」

俺を喰っても美味しくありませんよ！！だから喰わないで！！」

俺は必死に言った。恥もなく、言った。言ったださ！！死にたくないからな！！

と俺がそんなことを考えていると狼は

『やはり男を喰らうより女を喰う方が良いかもしれんな。幸い、この山には後三人居て、それが全員女みたいだからな。』

それを聞いた瞬間俺は

狼side

妾の名前はウールと言う。この名前は妾の母上が名付けてくれた。妾の目の先には人間の小僧が居た。その小僧は妾が居ることを知らなかったみたいだ。しかもその小僧が来たとき、3つの力と女の気配を感じることができた。つまりこの小僧か他の三人の女には今は使える者がいなくなつた転移の魔法を使える猛者が居て、そんな

奴が食えると。

そんなことを思いながら話し掛けたが、最初小僧は妾から逃げた。その時点で強くないなと思ったが、利用価値はあったから追い掛けた。人間より若干速くてちょこまかと逃げるから付いていくのは大変だった。

そして話しかけたら喰わないでくれと、懇願されたから妾は小僧に背を向けて言った。

『やはり男を喰らうより女を喰う方が良いかもしれんな。幸い、この山には後三人居て、それが全員女みたいだからな。』

今妾の背中後ろに居る男と言うか小僧を喰おうとしてたがあまり美味しそうではなかった。魔力を感じないし、弱そうで肉が良いものじゃないと思ったからだ。

だから、このシュートル山に居る三人の女を喰う事を目の前に居る男に告げた。

どうせ言ってもこの小僧にはなにもできないと思ったからだ。

妾は男に背を向け歩き出そうとした。歩き出そうと。しかし出来なかった。後ろに居る男によって。妾に向かって小僧は

「ふざけるなよ？」

と言ってきた。

その一言は妾を立ち止まらせてしまう程だった。怒りで立ち止まっではない、馬鹿にしたように立ち止まったわけでもない、憐れみで立ち止まったわけでもない、恐怖で立ち止まったわけでもない。それは驚嘆によるもので妾を立ち止まらせたのだ。

最初に思っていた考えが違っていることが分かり目の前に居る小僧を敵と定める。そして妾は小僧に向かって

『ほうー、凄いその力。かつて妾と戦った先代の魔王と同じぐらいとはな。』

妾も本気を出すかな。』

そう言っつて妾は抑えていた力を解放した。

ウールが力を解放した瞬間、ウールからブワツと力が漏れだし、周りの木々を震わせ、大地はその力に当てられたように揺れ出した。

黒斗はなんだか分からないがさつきから下を向いている。勿論、ウールが力を解放した時も下を向いていた。

ウールは黒斗から少し離れた。間合いのために離れたのでは無く、黒斗の不気味さ故に。

それはウールが黒斗と自分の力が自分のほうが強いと解放した瞬間に解つて、黒斗も理解した筈なのに無反応だったから。

ウールには訳がわからなかった。そんなウールを嘲笑うかのように黒斗は笑い始めた。

「く、くはははは！！」

ウールはそんな黒斗に恐れを感じていた。その恐怖を振り払うため

にウールは怒鳴りながら言った。

『何がそんなに可笑しい！！この力の差を見せ付けられも何故笑っていられる！？何故だ！！何故だ！！有り得ない！！』

そんなウールに黒斗は

「 お前は俺を怒らせた。その報いを受ける。 」

その瞬間何も持っていなかった手にはいつの間にか剣が握られていた。そのまま黒斗はウールに斬りかかった。剣の残す軌跡さえ無いほどの速さの速さで。

黒斗は右上から左下へと剣が振り下ろした。

ウールはその一撃に対して前の右足で受け止めようとした。受けとめようとしたが、出来なかった。

それは既に黒斗が左手にも剣を持っていて右の剣と交差させるように振っていたからだ。ウールはその姿を見て驚愕した。

『 つー！！ 』

驚愕したがすぐに冷静になったウールは一瞬で後ろに下がった。下がろうとした。でも出来なかった。それは黒斗が蹴って飛ばしてきた剣が飛んできたからだ。その剣はウールの顔を狙っていた。ウールは急いでその一撃を避けた。

ようやく止まった黒斗にウールは

『ビックリしたな。妾でもさっきの攻撃は危なかった。』

妾が攻撃を止めようとした瞬間に空いたほうを攻撃し、避けるため

に後ろに下がったときには、あらかじめ出しておいた剣を足で蹴りとは。

妾の行動を読んでいたのか？」

「ああ、そうだ。あらかじめ読んでいたから最初にあんな攻撃をしたがやはり避けられてしまった。剣を蹴ったときにはこれで終わりだと思っただがな。」

幾分か冷静になった黒斗にウールは内心ホツとしながらも質問した。

『先ほどからどうやって剣を出しているのだ？あの光を越える速さの激しい戦いの中でどうやって。』

「それはな、俺の持っている剣の亜空間をこの場所へと繋げてあらかじめ出せる状態にして、読んでいたお前の行動前に出していたからだな。」

「それにしてもお前強いな！いくら俺が手加減していてもさっきの攻撃でほとんどの奴が終わりなんだけど、避けきるなんて！これは俺も真面目にやるかな？」

その言葉を聞いたウールは（手加減していたなんて嘘だろうが！！キレてたじゃん！！と考えていたが声に出さなかった。）目を細めて黒斗に向かって

『冗談は辞めておけ、小僧！！。小僧じゃあ妾に勝てない！！さっきの攻撃の中で妾も手加減していたが今度は同じ手は食らわない。だから小僧の攻撃は妾に届かない！！それに例え届いたとしても妾はその剣じゃあキズ一つ付けられない。どんなに頑張っても無駄なのだ！！』

「確かにこの剣じゃキズ一つ付けられない。  
しかし次はどうか？この刀、『無』による攻撃は。そして無流の業は。」

そう言っただけで黒斗はなにもない空間から武器を出す。それはとても黒い刀だった。鞘に入ったままだけど抜かなくても威圧感を感じるほどのモノ。  
それを黒斗は静かに鞘に入れたままの刀を肩と平行となるように持つ。

その瞬間、ウールが先ほどよりも速いスピードで襲いかかってきた。そして黒斗は

「無流 無閃」

そう言っただけで瞬間ウールは血だらけになり倒れた。勝負は一瞬だった。黒斗は右手をウールに向かって出して、

「彼の者を直せ、レストレイション！！」

と言った。その瞬間ウールのキズが跡形もなく無くなった。無くなったと言っただけで元より傷なんて無かったと言っただけ。

しばらくして（と言っただけで）ウールは治して一秒だけ（目を覚ました。そしてウールは黒斗に向かって

『妾を助けたのか？どうして？』

「お前を殺したって他の奴がやるかもしれないから、お前に守ってもらったためだ。そしてやっぱり殺したくなかったからかな？」

その言葉を聞いたウールは

ウールside

『 分かった。妾は負けたのだから小僧の言うことに従う  
ま  
でだ。』

妾は負けた、初めて。妾のような上位の魔物は負けたら、その勝つ  
た相手のモノとなる。だから妾は小僧の言うことを聞かなければな  
らない。

そんなことを考えていたが

「違う、違う。これはお願いなんだよ。」

その言葉に妾は

『 お願い？どういふことだ？従わせるのじゃないのか？』

「俺は強制的なのはしたくないんだ。さつきキズを治したときにも言っただろ？死んで欲しくないって。それが助けた本当の理由なんだよ。そしてあれは建前だよ、助けるための。」

その言葉を聞いた瞬間、妾は  
をした。だから

初めての恋

『　　。い、いいだろう！！お、お願いを聞いてやる  
うー！！』

妾はこの恋を実らすために、お願いを聞いた。  
妾の答えに小僧と言うか愛しい人は喜び、妾に

「そうか、ありがとう。それと無理しなくても良いんだぞ。お前の  
本来の口調でしゃべればいいさ。」

愛しい人はワタクシの本当の口調の事を知っていた。妾なんて本当  
は使いたくなかったけどお母様からこの口調で喋りなさいと言われ  
ていた。

だけど愛しい人は使ってもいいと言ってくれた。だからワタクシは  
人型となって言った。

「ありがとうございます　お名前を教えてくださいても宜しいですか  
？」

「人間の姿になれたんだ。それとよろしくな。俺の名前は、コクト・  
サイジヨウ。お前は？」

愛しいこの方はコクト様と言うらしい。ワタクシはコクト様に



「ワタクシはウールと申します。これからお願いしますね、コクト様」

と言った。

ウールが付いていくことが決まって俺はお目当てのモノを探してからオーディーナたちと合流した。

オーディーナたちとウールは出会って最初に、思いつきり衝突したがこの山を下りるときには仲良くなっていた。

不思議だな、女性とは。男でよかったな、俺！！

そしてまた転移の魔法で町の近くまで行き町に帰った。

門番はあの人じゃなかったからウールのことはバレずに戻れた。

そしてギルドへと向かい成功とした印としてフユ草を出す。1キロだと調べ終わって銅貨三枚もらい、その時に倒した魔物の部位で銀貨一枚を貰った。

何故銀貨にいったのかは本来頂上の近くに居るDランクのオーガが混じっていたからだ。

ギルドが騒がしくなったけど無視して出た。

そして近くの雑貨屋で髪留めを2つ買って城へと帰った。ちなみに髪留め2つ合わせて銅貨三枚しました。

そして城へと帰ったら穂香と紬にメツチャ怒られました。

最初はどうして居なくなったこと。あの俺そっくりの奴は偽物だと分かって二人が探しに行こうとしたところで帰ってきた。

そしてウールのこと。アイツ等ウールの姿を見た瞬間、発狂した。

そして俺に襲いかかってきた。(性的なの)何とか撃退(?)して説明した、本当の事を。

今さらだがウールの容姿は上の上でとても綺麗だ。胸もしっかりと育っているが、背は140cm位と小さい。ある一種のマニアの人には人気のある背丈だ。それでもウールは美少女に入る。

そして何とか許してもらった。

第10話

俺と狼とバトルと仲間と（後書き）

今日位に投稿したいと思います。

どんな感想も待っています。

誤字などもありましたらご指摘ください。

それでは次回。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8616x/>

---

Almighty Wizard ~ 全知全能の魔法使い ~

2011年12月31日01時43分発行